北スラウェシ日本人会
NOTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第10号

目　次

1	巻頭のあいさつ	平野　健	第　1頁
2	着任あいさつ	後藤　昭	2
3	慰霊祭に参加して	糸満　盛健	3
4	日本人会と国際交流	上田不二夫	5
5	トモホンで日本語を教えています	上杉　祐子	11
6	７０歳からの挑戦	玉井　三郎	12
7	スラウエシシーラカンス	羽根井義博	17
8	ビトンから帰国、その後	川口　博康	22
9	ビトン市再訪	石野　赫	27
10	ミナハサ創造の民話	川井　雄二	30
11	墓地建設の御礼	長崎　節夫	34
12	泡盛の話	長崎　節夫	36
13	こんなことってあり？	平野　健	39
14	編集後記		40
15	会員名簿		41

ご挨拶

北スラウェシ日本人会
代表幹事　平野　健

当地在留邦人の皆々様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

会報「タルシウス」も、編集をして頂いている石野さんと長崎さんのご努力により、二桁の第十号を完成させる運びとなりましたことに、誠に感謝の念に耐えません。

本年当初の懇談会の席にて、新たに当地へ在留された邦人の方々がお見えになり、また、前田会長が長期にわたりご不在の状況が続いているため、小生が会長への就任とのご推薦を頂きましたが、大役を果たせる器でもなく、在留されている方々の数も少なくなり、小規模になったのにあわせて、代表幹事という形で会のお世話をさせていただく運びとなりました。

本年、日本のODAの援助による、海上用コンテナターミナルがビトン港に完成いたしました。産業活性により、日本企業の進出が期待されています。また、昨年、ビトンに完成いたしました、日本人墓地へ参拝される日本人の方も、今後、増えてくると思われます。微力ではございますが、できる限りのお世話をさせていただきますので、お引き立ての程ひとえにお願い申し上げます。

着任挨拶

在マカッサル総領事　後藤　昭

４月２６日、マカッサルに着任しました。妻同伴です。
私の在外公館勤務は、今回で７ヶ所６カ国となります。　今まで、欧州、中東、大洋州地域に勤務しましたが、アジアは初めてです。　現役中に一度はアジア勤務を経験したいという希望を持っていましたが、今回図らずも、アジア、それもインドネシアという日本にとって大切な国のマカッサルに勤務を命じられ幸運と思っています。

マカッサルでの最初の朝にアザーンを聞き、とても懐かしく感じました。
以前、中東のクエイトとシリアで勤務したときに、毎日聞いていたものでした。

ご案内のように、在マカッサル日本総領事館の管轄地域は、東インドネシア全域と広いものであり、比較的小規模の公館で全管轄地域を遺漏なくカバーしていくことは、決して易しいことではありません。そこで必要となるのは、在留日本人の方々からのご支援です。　皆様からの様々な形でのご協力とご支援なくしては、総領事館としての任務が十分には遂行できません。従いまして、総領事館と在留日本人は、ある意味で運命共同体と言えるかも知れません。

北スラウエシ州は、当館の重要な管轄地域の一つです。　北スラウエシ州のマナド、ビトウンは特に、古くから日本との交流があった地と聞いています。また、同州は、大学及び高校レベルでの日本語教育に熱心であり、日本としても講師派遣等で応分の協力をしていることは、皆様もご承知のことと思います。

次に、これは釈迦に説法となりますが、北スラウエシ州に滞在する在留日本人は、外国人であり、同地の文化・風俗・習慣を尊重し、当国の法律を遵守するということが極めて大事です。　これを念頭において滞在すれば、基本的には問題ないと思います。

以上、少し堅苦しい言葉となってしまいましたが、これは自戒でもあります。

最後に、北スラウエシ州をできるだけ早く訪問したいと考えていますが、皆様とは、公式、非公式に関係なく、意志疎通を図っていきたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

スラウエシ島ビトン市の慰霊祭に参加して

スラウエシ島日本人墓地整備会会長　　糸満　盛健

インドネシアのスラウエシ島ビトンシ市で漁業関係の仕事をしている長崎節夫さんが、沖縄県の地方紙で墓地整備協力の呼びかけをしたのは、２００３年１２月である。

その内容は、太平洋戦争以前から戦中にかけて同地で死亡した日本人の墓が無惨に荒らされ、その姿を見るに心痛く、そして異郷の地に眠る人の殆どが沖縄県出身の漁業者であり、これら先人達の活躍を振り返ると、同郷の後輩子弟としては彼等が安らかに眠れるよう墓地を整備し、そして「遠く離れた地に沖縄の漁法を導入した県人の足跡を残し、歴史を後世に伝えたい」旨のことであった。

このことはテレビ等でも報道され、私たち長崎さんの友人としても少しでも手伝えればとの思いから「スラウエシ島日本人墓地整備会」を設け、沖縄での協力呼びかけの窓口となったわけである。

ビトンと沖縄との関係については、１９２０年代の末期に蘭領東インド・セレベス島のメナドで造船所を営んでいた愛知県出身の大岩勇氏が、ビトンで「大岩漁業」を設立し、かつお釣り漁業とかつお節工場を営んだのに伴って、当時パラオ群島に進出していた沖縄県漁民を誘い入れたのが始まりとされている。

現在、大岩勇氏のご子息の大岩富さん（現地名　TOMY SEMRENG）はビトンにご健在で活躍されており、今回のことが機会となって直接お会いし、いろいろなお話しや貴重な資料等をいただくことができて感激したしだいである。また、沖縄県出身者のご子息で現在ビトンで漁業を営んでいる我喜屋（がきや）さんにもお会いできて、ビトンと沖縄の関係の深さを改めて感じた。

１９４０年代の始めごろ、ビトンは「大岩漁業の街」として賑わい、８０余名の沖縄県漁民がかつお釣り漁業に従事してたようであるが、そのうち３５名が戦争の犠牲となった。からくも生き残った者は戦後沖縄に引き揚げている。引き揚げ者や遺族たちは、１９８３年ごろまで遺族会を結成したり、また、ビトンを訪れて残留家族の調査や慰霊祭を行なうなどしたようであるが、戦後６０年を経て当事者の多くは高齢となりまた亡くなったりして、いまでは関係者を探し出すこともだんだん難しい状況になっている。

しかしながら、何名かの遺族から積極的な協力申し入れがあり、なんとかある程度の資金を募り心ばかりの協力ができたが、実際の現地での墓地建設にあたっては、現地で働く日本人関係者などによって重機類、資材の提供など献身的な奉仕がなされ、私たちの協力金だけでは到底及ばないような立派な墓地が出来上がった。　改めて皆さんに感謝申し上げる次第である。

私たちは、昨年９月２２日に墓参団としてビトンを訪れ、墓前で沖縄三線の演奏や伝統舞踊を奉納し、余興の終わりには現地の皆様も総出で沖縄のカチャーシーを舞って御霊を慰めることができました。

ところで、最近のインドネシアと沖縄の交流関係を見ますと、現在沖縄県には２００名以上のインドネシア人が滞在していると言われ、また琉球大学や名

桜大学等への留学生もおり、幅広い交流が期待されている。いろいろな交流促進の窓口としては沖縄インドネシア友好教会が設立され、交流イベントの開催など各面のサポートが行なわれている。

一方、水産関係については、県都那覇市が毎年３０余名のインドネシア人漁業研修生を受け入れて鮪漁船の乗組員養成をおこなっている。　６ケ月間の日本語研修・漁業技術研修の後は漁船に乗り込み、漁船乗組員研修生として活躍している。　インドネシアと沖縄は、漁業の対象魚類や海域状況も似ており、また気候風土や食生活等も似たところが多いので研修生にも馴染みやすいと思われ、研修の成果が期待されている。

「戦争」という悲惨な体験の末に、多くの同胞が家族と引き裂かれて日本への引き揚げを余儀なくされ、あるいは二度と郷里の土を踏むことなく異郷ではて、決して癒されることのない悲しみを残しているが、先人達のインドネシアに寄せる思いは、あの海、ヤシの山々、そして優しさいっぱいの現地の人々の笑顔によせる思い出ではないかと思う。

過ぎ去った歴史を元には戻せないが、先人の残した功績を後世に伝え、新たな絆を築き、お互いの発展を図っていくことは後輩子弟の務めではないかと思う。　その中心となって活躍しているのが現地の日本人会の皆さんである。皆今後ともインドネシアと日本の架け橋として活躍されることを祈念致します。

日本人会と国際交流
－国際交流と沖縄大学の役割-

沖縄大学法経学部教授　　上田不二夫

はじめに

日本人会という名称には、普段まったくご縁がない。　昨年の日本人墓地移転問題で、北スラウエシの日本人会にお世話になって以来、大学教育とどのように関連させられるか、「国際交流」という視点から日本人会について考えてみた。　背景には、全国的な大学間競争や少子化対策といった経営問題があることも事実である。　厳しい現実を、夢のある計画で乗り切りたいという願望も併せてお許し戴きたい。

「日本人会」「海外日本人会」という名称でネット検索（Goo)すると、約１００万件近い項目が示される。　この数自体が多いのか少ないのか門外漢には判断できないが、インドネシアに限定してみるとそんなに多くはないという気がした。　日本人会の数にしても１４ヶ所しかないことなど、中国の４３ヶ所と比較すれば、日本の国際的な関心度がその程度かと思える。
インドネシア、それも北スラウエシを想定しての国際交流教育について、若干の提言を以下にまとめてみたい。

１．　沖縄大学の紹介　（概要）

沖縄大学は、沖縄県の県庁所在地「那覇市」に戦後最初に誕生した私立大学である。　学生数は二千名弱、学部は法経学部と人文学部の２学部３学科（法経、国際コミユニケーシヨン、福祉文化）のミニ大学である。　県都那覇市にあり夜間課程があるため、勤労学生が昔から頼りにしている大学でもある。
国際交流に関係する学科は、国際コミュニケーション学科であるが、英語と中国語を軸に語学教育の充実が図られている。　特に中国語は、県内でも最強といわれるスタッフがおり、中国語発表大会でも全国レベルの入賞実績がある。　学部の教育ではないが、県内の４年制大学で唯一、学内に設置されているのが、「別科」である。　民間にある日本語学校と同じ、専門学校レベルであるが、大学付属であるだけに、その内容には民間の語学学校とは違った特色がある。　通常は１年課程であるが、２年課程も開設されており、別科から県内外の大学（国公立、私立）へと進学する学生も多い。　大学進学が目的で入学するのだから当然とは思えるが、本学には留学生に対する給付型の奨学金支給が多いともあって、別科・学部とも中国からの入学者が圧倒的である。

（１）　「別科（日本語教育センター）」の紹介と活用法

別科の目的は「沖縄大学または他の大学に進学を希望する外国人に対して、

日本語教育ならびに日本文化等に関する基礎となる教育を行なう。」ことにある。　外国人教育が原則となるが、在外邦人子女の入学実績もある。　以前日本国籍ではあるが中国育ちの学生が入学したこともあった。　これまで教育期間は１年間であったが、２００５年度から２ヶ年課程も新設された。　１年課程では「終了後、大学の学部および大学院での講義を受講できることが可能なレベルの日本語能力が修得できる」という。　かなり高度な語学教育といえよう。

その点を緩和したのが２年課程である。　別科担当者によれば、２年課程の受験レベルは「日本語能力４級以上を有する者」という。　４級とは、ひらがな、カタカナはもちろん、簡単な日常会話ができる程度をいい、受験生は現地の日本語学校等でこの程度の日本語能力を修得していることが前提になる。

学生の大半は中国系である。　中国人は漢字がベースにあることもあって、受験および就学上の諸条件は有利と思われ、逆にインドネシアからの留学生にはハンデイが多いかも知れない。　インドネシアでも既に日本語学校は設立されているかと思うが、日本留学前の教育を大学と連携をとりながら実施できないものだろうか。

２．沖縄研修生と日本人会

先日、糸満漁港で三重県紀伊長島のまぐろ漁船（ 19 トン型）を見学した。船員は５名、その内３名はインドネシア人（研修生）であった。　日本全国、漁船乗組員に外国人が多いのは、今や普通のことになっている。　沖縄の水産会でもインドネシア人研修生を受け入れており、県内のまぐろ漁船に配乗して研修にあたっている。　漁船乗組員の問題だけでなく、2010年以降ＡＰＥＣとの国際的な約束もあって、農水産業の自由化（農水産物、労働力）が予定されている。　沖縄も、このような日本の枠の中にあり、東南アジアとの関係をより密にせざるを得ない状況にあると云えよう。

日本人会は、このような研修生送りだしの組織として、事前教育など大学との提携はできないだろうか。　漁業分野だけでなく、菓子産業や食品加工業には、沖縄の技術・技能の活用が有効ではないかと考えている。　インドネシアでこれらの産業の中堅幹部になれるような教育・研修を、大学が窓口になって実現できるのではないかと思う。

３．　海外インターンシップと日本人会

本大学の重点教育方針にインターンシップがある。　県内外の企業、団体等で就業体験をするものであるが、就職前の体験実習として大学教育の主要な柱になっている。　この体験を海外にまで拡大することが日本人（学生）の国際化に極めて有効であると思うので、日本人会との提携をお願いしたい。　研修期間、場所とも未定であるが、日本人会でホームステイの形式をお願いできれば、送り出す側の不安も大きく軽減される。　受入れと引き換えに、日本人会関係者の本大学進学に関しては、大学側で条件整備をするというようなバータ

ーな提携内容になるかと考えている。
沖縄でも学生は地元志向が強く、海外への関心が薄れがちである。　しかし２０１０年問題は、沖縄にとってアジアとの経済共同体になれるのかどうか、沖縄県のみならず学生の将来にも大きく関係してこよう。

４．糸満市の国際交流事業と日本人会

漁業の町「糸満」、という評価は国内だけでなく海外からもある。　インドネシアともその関係は古くかつ強い。
糸満漁民は「追い込み網漁法」という独特な潜水漁法を駆使して世界的な範囲で出漁した。　インドネシア一帯にも出漁し、現地で結婚し、北スラウエシにはその子孫が五世まで誕生していると聞いている。　その歴史には中国残留孤児と同じような背景があるが、中国残留孤児ほどには日本政府の援助は行なわれていないと承知している。　それでは彼らの「ふるさと」糸満市において、このような海外に居住する糸満系住民に対する配慮は存在するのであろうか、糸満市の国際交流事業を担当する係に問い合せてみた。　担当者によると、現在糸満市で実施されている国際交流事業は、主として英語圏との交流であり、市が発行する文書や報告書の類を英語に翻訳することが主業務で、その合間に学校に行き英語教師の役を果たしている、ということであった。　予算の大半は人件費であり、それも一人分がやっとの規模であった。
沖縄県内市町村の大半が糸満市と似たようなレベルではないかと思う。　しかし糸満市には、過去において海外に漁民を送り出した歴史と共に、現在は他の市町村にはない「高度水産都市」としての先行事業が存在している。　第３種に指定されている糸満漁港は、県内最大の漁港であり、県外漁船も活発に出入りしている。　水産関連施設としては、水産公社魚市場、県漁連加工施設、蒲鉾組合加工場、水産公社冷蔵庫、糸満漁協魚市場、などがある。　試験研究・教育施設としては、沖縄県水産試験場、水産業改良普及所、県立沖縄水産高校がある。　民間の水産関連施設には、造船所、機関修理工場、食品加工会社などがある。　糸満市には、水産業に関係するあらゆる機能がそなわっている。
以上のことから、糸満市は水産業研修生を受け入れるのに最適な環境にあることが理解できよう。　糸満市の国際交流とは、このような条件を活かした事業内容であるべきで、海外からの水産研修生に対する多様な支援策が検討できよう。

５．　沖縄水産高校の実習船活用法

日本の水産高校は、世界でも珍しい専門学校と言えるのではないか。　どの国にも設置されているわけでもなく、あるとしてもその数は非常にすくない。
日本には現在、３４県に５３校（分校をふくむ）があり、沖縄県でも２校設置されている。　つまり、ほぼ県単位で水産高校を保有している状況である。
そして、その水産高校には大型の漁業実習船が付属している。

実習船の運営には、膨大な経費がかかる。　手元に平成１５年度の愛媛県予算の資料がある。　経費別予算のトップにあげられているのが「水産実習船経費である。　ハワイ沖で原潜と衝突事故を起こした実習船の代替船「愛媛丸」を使っての実習実施経費で、金額は一億五千万円。　高校経費のなかではダントツである。　実習船自体は、日本政府負担で建造してくれるから県の負担は小さい。　いわば、海の公共工事といった位置ずけかとも思う。

沖縄県も平成１４年度に「海邦丸５世（４９９総トン）」を建造（新替え）したばかりである。　沖縄県の大型漁業実習船は、現在この海邦丸５世一隻だけであるが、平成１４年まで２隻の大型実習船を保有していた。　水産高校２校に２隻と、申し分のない配備であったが、生徒数が減少傾向にあったから１隻に縮小されたのも当然のことかと認識している。

いま思うに、我々はこの大型実習船の活用法を間違えていたのではないか。水産教育の衰退を嘆く声は大きいが、明治以来、「水産」と云う産業教育は連綿として続けられ、今後も消滅することはないだろう。　それは、日本国における水産業の位置ずけを考えれば当然のことである。　しかし、時代が変われば産業の質も変わらざるを得ない。　水産教育も時代に即応した、あるいは時代を先取りした教育内容を考えなくてはならない。

他の産業もそうであるが、水産業ももはや、日本国内の枠組みだけで成り立つものではない。　このような時代に水産高校の教育はどうあらねばならないか。

ここに、漁業実習船の存在価値が大きく浮かびあがる。　実習船というのは言わば「動く校舎」である。　必要な時に、必要な場所へ持っていける。
沖縄県は、現在の水産教育の「境界線」を即刻取り払って、東南アジア・ミクロネシア、メラネシアの国々まで守備範囲を広げるべきである。

海邦丸５世は７月１０日現在、インド洋にてまぐろはえなわ漁業の実習中である。　往きも帰りもマカッサル海峡を通航する。　例えばビトンの水産学校と何らかの形の接触をすることは、物理的には極めて容易な事なのである。

即ち、沖縄県は大型実習船を使って、県内生徒に対する教育の成果をあげるだけでなく、国際交流あるいは国際貢献の事業を展開できる。

実習船の活用を考え、糸満漁港の多様な機能を組み合わせることができれば、糸満市のみならず沖縄県の国際交流事業の産業的価値の見直しにもつながるのではないかと思っている。

５．　寄付口座、指定寄付、冠奨学金の活用と日本人会

近年、沖縄大学が県内の他大学に比べて元気があるとすれば、その原因のひとつは大学が外部との提携を強化している事にあろう。

去った６月３０日、我々学内外の有志は「泡盛学会」を発足させた。　「泡盛」という沖縄の産業財産を育成するという目的に、大学関係者が参加したことになるが、その背景には本大学の講座に、泡盛マイスター協会の寄付講座、「泡盛マイスター養成実践講座」が設置されていることが大きい。　ワインの

ソムリエに相当する泡盛のプロを育てたいという協会の目的は、泡盛産業の育成に密接につながるので、大学から協会に講座設置をよびかけたのである。
「寄付講座」というのは、理科系講座には昔からあり、その設置経費も人件費込みということもあって、最低でも一千万をこえるのが普通であった。　沖縄大学がはじめた「寄付講座」は、講師派遣型と現金寄付型の２種類ある。
前者は、寄付者側が講師という形で寄付するのであるから人件費は発生しないことになる。　現在、設置されている「証券学入門講座」は、証券会社の支店長が講師となって実施されており、講師料相当額が大学への寄付ということになる。　後者は、１回の講師料を１万円とすれば、年間講義は３０回（４単位）だから、３０万円で講座開設が可能、ということになる。
これに加えて、「指定寄付」「冠奨学金」といった外部資金獲得にも努力している。　これら外部からの寄付金に対しては、税務署が認める経費扱いの領収書が発行されている。　宗教法人と学校法人は、税金対策上優遇されている事実はあるのに、本大学はその活用に消極的であった。　分からなかった、というのが正確なところか。　寄付する側からは、税金に持っていかれるよりは有効に活用できるということで、このシステムは概ね好評を得ている。
「冠奨学金」の冠とは、奨学金に寄付者の名前が明示されるという意味である。　「００株式会社奨学金」と具体的に名称が付けられる。
日本人会にお願いしたいのは、このような制度を利用して、国際交流講座を寄付して戴けないかということである。　講師派遣型でも現金寄付型でも、日本人会の目的を支援できる講座内容を考えて戴けたらとおもいます。

大学も従来のような感覚での経営は不可能となっている。このような危機の時代だからこそ、本来の教育目標について真剣に考える状況にあるといえるだろう。

現在、寄付講座の中に「菓子産業プランナー養成実践講座」というながある。この講座は、東京から講師が派遣される講師派遣型の部分と、沖縄県からの寄付金を併せて開設されたものである。　大手菓子企業（グリコ、森永、明治など１０数社）のバックアップと菓子産業コンサルタントの熱意で実施されているが、国内の大学には「菓子学科」がないこともあって、菓子関係者の期待も大きいという。　開設に協力した者としては、県内菓子産業の振興を考える県当局の期待とは別に、２０１０年体制を視野にいれた「別科教育」の活性化に狙いはある。　たとえばインドネシアに現地工場を構えるとか、あるいは原材料の供給を求めるためには、地元人材の協力は不可欠であろう。　事業の展開以前に人材の育成を考えるべきだと思う。　そこで本大学の「別科」の役割が出てくる。　必要人材を別科で教育し、インドネシアに送りかえす。　このような場面で、人材の発掘、選定等に日本人会の役割を期待したいのである。

おわりに

４０年来の友人長崎君の依頼もあって原稿を書いたものの、不十分な点も投稿することになった。　北スラウエシ日本人会には、外務省という行政機構の役割とはまた違う立場で国際交流の最前線に立っていると言えるであろう。外務省としても、おそらく現地日本人会のこのような立場は心得ており、日本人会の活動に期待するところも大きいのではないか。

私も、沖縄という海外移民の歴史では特色のある県に４２年も滞在しているヤマトンチュ（本土出身者）である。　一応、静岡県出身ではあるが、両親は愛知県、私の出生地は千葉県という複合型である。

沖縄の若者が海外に関心が持てるように大学教育にも工夫が求められる。本学は私学であり、予算人員共に制約だらけの状況であるが、考える事だけは無限大にできる。　現地日本人会と大学が提携できれば、いろいろな企画が実現できそうである。

長崎君の依頼に十分応えられなかった点をお詫びしつつ、北スラウエシ日本人会の皆様に沖縄大学のＰＲをさせていただきました。

トモホンで日本語を教えています

PPBJ ミナハサ　日本語専任講師　　上杉 祐子

私がメナドという地名を耳にしたのは、ずいぶん以前のことです。　1980年代にダイビング雑誌の取材・編集をしていた頃、インドネシアに詳しい方からとてもすばらしいところだと聞きました。それから20年以上たって、メナドにも近いトモホンに新しい日本語教育機関ができることを知り、今年3月末、ＰＰＢＪミナハサに着任するに至ったわけです。　昨年9月はダイビング旅行を兼ねて下見にも来ました。　10日ほど滞在して、ブナケン島、メナド・トウア島周辺でのダイビングをしたり、トモホン、トンダノなどを訪ねたりしました。　自然環境の美しさだけでなく、日本との歴史的なつながりも興味深いと思いました。　フィリピンやタイのような日本人町はなかったにしても、かつてスラウエシ島に朱印船で渡ってきた日本人はいたのでしょう。　また、沖縄などから移住してきた漁師、水産業の方たちのことも知りました。

そして4月8日の開校式を行ない、１１日からＧＭＩＮ本部のあるブキット・インスピラシに立つＰＰＢＪミナハサの教室で、月曜日から金曜日までインドネシアの方達に日本語を教えています。　すでに3か月近くたち、全くひらがなも読めなかった、ゼロから始めた学生さんたちも、授業以外の会話もできるようになりました。

そもそもインドネシアの日本語教育は、１９４２～４５年に軍政下で行なわれたこともありましたが、大学で始まったのが１９６０年代、８０年代以降は高等学校の第二外国語として盛んになったようです。　そこで学習者数から見ると、高校で勉強している初級学習者が圧倒的に多く、７５％ほどを示します。ＰＰＢＪミナハサの本科コースの初級学習者のなかにも一部、高校で履修したことのある人が含まれています。

日本人会の皆様方はご存知のことですが、トモホンで日本語を学んでも、すぐに教室の外で会話を実践することはできません。　また、メナドに来る日本人旅行者はダイバーが多く、ミナハサ高原まではなかなか訪れませんので、旅行者に日本語を試す機会もありません。　そこで、日本語を勉強した後どうしますか、将来の夢は何ですか、と聞いてみると、日本へ行って勉強したり働いたりしたいという答えが返ってきます。　一方、日本は経済のグローバル化とともに、少子高齢化で労働者人口の不足が問題となり、これまで海外からの単純労働就労者を日系人、技術研修生などに限定してきた状況が大きく変わることが予想されます。　すでに人材交流の政府間の交渉は始まっています。時が来れば、「日本に行って働きます」という希望はかなえられるかも知れません。しかし、ＰＰＢＪミナハサに在校中にも、もし皆様のお時間がありましたら、あるいはミナハサでの日本語教育にご関心をいただけましら、学校へお出でいただいたり、メナド、ビトウンでの日本語実習にご協力いただければ嬉しくおもいます。　そして、日本語教育を通じて、ミナハサと日本との橋渡しができるようになったらいいと思っています。

７０歳からの挑戦

ミナハサ日本語研修センター　　玉井三郎

１．　戦後５０年終戦記念日の誓い

今から丁度１０年前、１９９５年の終戦記念日に、私はかつて学徒勤労動員で働いていた陸軍第二造兵工しょう跡地の正門前に立っていました。　その地は王子で、石神井川につながる堀が大きく迂回している地形で、当時から頭に焼き付いていました。　今は日本たばこ産業の工場になっていましたが、正門の位置は変わっていませんでした。

私は、そのとき６５歳で、まだ仕事を続けておりました。　あと１０年は仕事を続けられるが、そのあと何をしたらよいか、思い悩んでいました。

ところが、この正門の前に立って、忽然と「インドネシア人に日本語を教えよう」と思い立ったのです。

２．　日本語を教える

私は、１９６４年から経営コンサルタントの仕事をしておりました。企画診断指導、各種研修、全国講演、海外視察などが主な仕事でした。　この中で培われたものは「話す、書く、教える、指導する」能力でした。　これらの能力を活かして何かをしよう、と考えたわけです。　その何かが「経営」から「日本語」になりました。　全ての日本人が日本語を話せるからといって、日本語を教えることができるとは限りません。やはり、日本語教育のための専門教育を受ける必要があります。　私は、仕事を続けながら２年間、拓殖大学の日本語教師養成講座に通いました。　入学した人は３９人でしたが、卒業できたのは２０人でした。

３．　インドネシア人を対象に

１９８３年、私は夫婦でインドネシアに旅行することを計画しました。　それまでの海外旅行は多くの経営者を集めて視察団を組み、そのコーデイネーターとなり、アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアなどの企業経営、社会環境、雇用状況、商業施設など見学するのが目的でした。　私は、団体旅行ではなく個人でのんびり旅行をしたいと思い、最初に夫婦だけでのインドネシア旅行を選んだのです。

そのため、インドネシア語を勉強する必要に迫られました。　そこで、拓殖大学のインドネシア語講座に、１年間通いました。　この講座の終盤で会話を担当したのが、まだ日本に来たばかりのイドリスノ・ファリダ先生でした。
このファリダ先生を通して多くのインドネシア人と知り合いになり、日本語を教える対象がインドネシア人に絞られてきました。

４．　色々な人との出会い

ソァリダ先生はムスリムですが、マナド国立大学（以前の教育大学）の卒業生です。　この先生が1985年に、月一回のインドネシア語の勉強会「テラタイ会」を作りました。　私は、その会に翌年から出席していますが、1988 年から現在に至るまでは、会の幹事、取りまとめ役をしています。

この会には常時、日本人出席者が１７～２０名、インドネシア人は１０名程度が出席していますが、ほかにも多くの人が出入りしていました。　その延べ人数はざっと５００人以上になります。　この５００人の人達と私との出会いがありました。

その中に、マナドに関係する人が何人かおりました。　特に関係が深かったのは、「オバ次郎」でした。　オバは現在８６歳になりますが、７７歳のときにマナドに家を造りました。　オバとはそのとき以前からの知り合いでした。

５．　選ばれたミナハサの地

私が日本語教師養成講座を卒業したのは、７０歳になろうというときでした。この年になるともう他人に雇われることはできません。　日本語を教える機会といえば、「テラテイ会」に来るインドネシア人に日本語文法の本を自作し、これを教本にして月に１回、３０分間教える以外にはありませんでした。

そこで、これから日本語を教えるには、自ら日本語学校を作る以外にないとかんがえました。　各方面に当たってみると、日本で作る場合には、土地代金は別にして２億円の資金が必要だということがわかりました。　私は、日本語学校を作る意志はありますが、恥ずかしながら資金は一銭も持ち合わせていません。　そのような多額の資金は、どこを探してもありません。

それならば、いっそのことインドネシアで学校を作ったらどうだろうと考えて、何度もマナドを訪ねました。　車でマナドの市内を回りながら、どこにしようか考えていました。　確かに建設資金は日本の１０分の１で済みそうです。しかし、具体的にこの土地だと決めることはできませんでした。

２００２年３月、オバ次郎の誕生日パーテイーがマナドの家で開かれましや。そのときに礼拝の説教に来た、グミン（ミナハサ福音キリスト教団）のニコガラ総書記と会いました。　私ども夫婦はニコガラ先生夫婦と、日本で既に会っていましたから、初対面ではありませんでした。　このとき、ニコガラ先生に「日本語学校を作りたいが、場所をどこにしたら良いのか困っている」と訴えました。

それから数日後、ミナハサにあるグミンの本部を訪ねたとき、仮本部建物の向かいの丘に連れて行かれ、この地に学校を建てなさい、と言われました。
その丘は、後ろにグミンの講堂があり、隣はトモホンキリスト教大学の学生寮でした。　広さは３００坪ほどあったでしょうか。

6．　何故、どうして？

２００２年の３月、私は約２０年間続けていた経営コンサルタント会社を清算しました。　ところが、数社の顧問先から個人でよいから顧問契約を継続してくれないかと頼まれました。　私にとって、これは有り難いことでした。

生活の設計は年金のみで立て、ここからの収入を全部、学校建築に回すことができる、と考えたのです。　３年も経てば、税金と経費を支払った残りの資金で、学校が建築できます。　そこで、学校開設の時期を２００５年４月と決めて、それまで何とか仕事を続けて、資金を蓄積するることにしました。

しかし、何故、「グミン」がこのように日本語学校の建設に協力的だっったのでしょうか。　この謎を解く鍵は、これまでのいくつかの布石にあります。

まず、マナド．ミナハサの土地から日本の茨城県大洗町に、５００人とも７００人とも言われる人が来て働いています。　その殆どが不法滞在者と言われています。　しかし、日本のイミグレーションはその退去には積極的ではありません。　彼らがいなくなると、大洗の水産加工関係の会社７０ほどは、倒産してしまいます。　また、大洗の町は購買力を失い、灯が消えたようになるでしょう。　さらに彼らは、その土地に「ベツヘルム教会」など幾つかの教会を建て、毎日曜日の礼拝を守っています。　これらの教会はグミン傘下の教会になっています。

この状況を「日本キリスト教団」の北関東支部で見過ごすことはできません。　日本キリスト教団は、韓国やフィリピンなど多くの外国の教団とは「宣教協定」を結び、韓国人の牧師が日本の教会で説教したり、日本の教会の中で活動したりしています。　しかし、インドネシアの教会とは何の結びつきもなかったのです。

日本の教団とインドネシアの教団が、お互いに同じ目的を持って国際協力をしたいと考えるのは当然のことだと思います。　しかし、大洗のインドネシア人は、５年も７年も大洗の地に生活していながら、まったく日本語が話せません。　それは日本人との接触が少ないからです。　ベツヘルム教会の牧師（日系３世）ですら日本語を話せません。

グミンが日本語を話せる牧師や教師を育てたいと願うのは当然のことなのです。　従って、グミンの施設の中に日本語学校が建設されるようになったのは、決して偶然の結果ではありません。

7．　大勢の協力者

日本のキリスト教とグミンが、キリスト教の歴史の中で何の関係もなかったことはありません。　１９４２年１月１１日、日本海軍の落下傘部隊がこのミナハサの地に降り立ちました。　ミナハサの地はインドネシアにしては珍しく、キリスト教徒が住民の８５％を占めています。　当初、日本の軍部はキリ

スト教を「敵性宗教」と位置ずけ、この地で弾圧を行いました。　早稲田大学の原信氏の資料によると、殺害された牧師・教職者の数は５３人になると書いてあります。

その結果、マナド・ミナハサの地方行政は全く機能しなくなってしまいました。　この地のキリスト教は、住民の生活の中に根づいています。　日曜日の礼拝は、早朝、朝、夕方と３回ありますが、住民の殆どが出席します。　この礼拝のとき、住民の現在の消息が伝えられます。　病気、入院、結婚、出生、死亡など様々なことが連絡されています。　教会の指導者が殺害されると、地方行政の機能がとまってしまうのです。

これに驚いた日本の軍部は、日本から牧師、神父を２０人呼び寄せることにしました。　最初の４人は船便で来たため、途中の台湾沖で潜水艦によって沈められました。　残り１６人は飛行機で到着し、「日本国憲法第２８条には宗教の自由が書いてある。日本軍は宗教を弾圧しにきたのではない」説いてまわったと言うことです。

死亡した４人の牧師の中に、私の５５年来の友人の兄がおられました。その友人から「ミナハサは兄の赴任予定地であったので、それを記念して、すこしでも学校建設に協力したい」と申し出がありました。　私は、この申し出を受けて、大勢の友人や親族、北関東地区の教会を中心とした教会員の方々に献金をお願いするパンフレットを作り、寄付のご協力をお願いしました。　その結果、学校建設資金の７０％以上が集まりました。

８．　現地での協力者

私は、自ら第一号の日本語教師となってミナハサに赴任することを望みました。　しかし、日本語教師の仲間達から猛反対を受けました。　その理由の第一は、７５歳の高齢では１日数時間の授業に耐えられないと言うのです。また私の教え方より若い人の中には優秀な先生が大勢いるとも言われました。
さらに、グミンと日本との連絡係が必要なのに、誰もいなくなると困るのではないか、とのことでした。　やむを得ず先生４名全員を一般公募で募集しました。　既に赴任しております。

しかし、彼の地と日本は離れています。幾らインターネットで毎日のように連絡しあっても、現地の先生方だけでは動きがとれない問題が発生します。
水道ポンプが小さいので取替えなければならないが、どこに売っているのか分からない。　買ったばかりの冷蔵庫が動かない。　現地職員の就業規則を作ったが、どうやってこれを伝えたらよいか。　などなど処理すべき問題はたくさん発生しています。

私は精一杯、年に６回しか渡航できません。　日本でまだ仕事を持って稼いでいますし、学校の採算計算に基づいた授業料のシュミレーション、学生募集の企画や、新たに運営基金の募金活動などを行なっています。

しかし有り難いことに、この日本語学校（正式名称は「ミナハサ日本語研修センター」）を作る前まで「マナド国立大学」の日本語学科の学生に何年にも

渡って日本語を教えていた関係で、ここの大学の日本語学科の先生方とは親しくつきあっていました。　この人達は日本で大学院を卒業していますし、日本語を流暢に話します。　学校とグミンとの関係や、現地職員との問題の処理などにこの先生方の絶大な協力があるのです。　インターネットのメールを使った、この先生方との連絡・協力がなければ、このような遠隔地のコミュニケーションを伴う事業はできなかったと思います。

また、ミナハサの地はマナドから４５分も山岳地帯に入りますので、車を持っている人の協力が必要ですが、「ナラタイ会」で知り合ったマナド人が、必要なときにはいつでも車を持ってきてくれます。

９．　終わりに

これからも困難な問題を処理する必要に迫られるでしょう。　事業は今始まったばかりです。　どのように進むかも手探りの状態です。　どうか、大勢の皆様方の暖かいご声援とご援助をお願い申し上げます。

以上

スラウェシシーラカンス

羽根井　義博

北スラウェシ日本人会を2003年に退会して早2年余り、現在は日本で生活をしております。

先日、新聞をぱらぱらと開いていると、見慣れた形が目に止まりました。

紙面には、スラウェシ島が描かれていました。それは、入会中に私が暮らしていたビトンのご近所、マナドを指し示している図でした。

「インドネシアで生きた化石探し」と銘打たれたその記事には、こんなことが書かれていました。

福島県の海洋科学館「アクアマリンふくしま」が、4月にインドネシアで、インドネシア科学技術院とサムラトランギ大学の協力の下、生きた化石と呼ばれるシーラカンスの現地調査に乗り出す。

そして、この出来事はジャカルタ新聞でも、次のように取り上げられていました。

シーラカンスを撮影し、生態解明に役立てようと、前記グループがマナド沖で、学術調査を実施する。「アクアマリンふくしま」は、福島県小名浜沖を流れる黒潮の源流がマナド沖であることから、同沖に住むシーラカンスの展示コーナーを設置、国際研究組織「シーラカンス委員会」を設けて、シンポジウムを開催してきた。

また2001年には、インドネシアのシーラカンス研究の第一人者であるインドネシア科学院(LIPI)のモハメド　カシム研究員を同館に招いたことがきっかけで、このほどインドネシア政府から調査許可が下りた。

「アクアマリンふくしま」から6名、LIPI、米国の高深度潜水チーム9名が、4月17日からブナケン島周辺のマナド北西沖で調査を開始、最大水深300mまで潜行可能な自走式水中カメラを用いて、シーラカンスの映像撮影を試みる。

マナドでシーラカンスが発見されていた事は、以前私も聞いたことがありました。ここで、マナドのシーラカンスについて、ご存知の方も居られると思いますが、ご紹介させていただきます。

シーラカンスという魚は、硬骨魚類　肉鰭亜綱　総鰭目のなかまです。

肉鰭類は、デボン紀に出現した魚類で、両生類の起源と考えられているなかまも分類されています。これが、生きた化石と言われる所以です。

デボン紀は、4億1000万年から3億6000万年くらい前までの時代で、魚類の種類や数が急速に増え、「魚類の時代」とも呼ばれています。ちなみに、恐竜で有名なジュラ紀は2億1000万年から1億4000万年くらい前で、デボン紀に比べると2億年近くも新しいのです。

シーラカンスは、8000万年から7000万年前に絶滅したと考えられていました。

しかし、1938年アフリカ沖ではじめて見つかり、1950年代にはインド洋のコモロ島、マダガスカル、しばらく時を置いて1998年にインドネシアで再び発見されました。

現在の肉鰭類は、淡水に肺魚類、海水に総鰭類が生息しています。

その総鰭類のラティメリア属の一種がシーラカンスです。

総鰭類は、手足のような鰭を持つことが、特徴の一つです。そして、頭を上にしたり、真後ろに泳いだりすることができるそうです。食性は肉食で、生息場所は水深70mから300m位の火山性の岩礁や洞窟とされています。

マナド沖のシーラカンスは、1997年9月18日アメリカの海洋生物学者マーク・アードマン、アルナス・アードマン夫妻によって、マナドの魚市場で発見されました。

アードマン博士夫妻は、初めて目にする実物に興奮し、撮影はしますが、すでに過去にもインドネシアのどこかで発見記録があるものと思い、その場では確保しませんでした。

帰国後、カリフォルニア大学での調査により、大発見であることに気づき、本格的調査を開始しました。

1998年7月ようやく2匹目のシーラカンスを捕獲することに成功しました。研究チームにより、「スラウェシシーラカンス」を新種として命名しました。

1999年の国立科学アカデミーの会報によると、遺伝子研究の結果、スラウェシのシーラカンス群は、おそらく1600万年から550万年位前にコモロのシーラカンス群と分かれた、異なる種と推定されました。

この生きたシーラカンス捕獲の発表は世界中のニュースになり、「ネイチャー」誌などにも掲載されました。

すると、ご多分に漏れず、海外のブローカーがスラウェシ島に入り込み、シーラカンスを捕まえ、金儲けを企てる動きがあったそうです。現にコモロ島では、高額の報奨金が掛けられ、約250匹ものシーラカンスが捕獲されてしまいました。

このような事が、スラウェシで再び起こらないように、スラウェシシーラカ

ンスの保護のため、日本の民間グループが、JICA の海洋保全の専門家や、アードマン博士らと共に「シーラカンス　プロジェクト」を立ち上げ、今回と同様の調査の立案や、現地聞き取り調査、啓蒙活動が行われました。

その聞き取り調査によると、現地のサメ漁によって、かなりの数のシーラカンスが漁獲され、捨てられていたり、市場に出回っていたりすることが確認されました。

ざっとマナドのスラウェシシーラカンスについて述べてきました。

今回の「アクアマリンふくしま」による調査は、本当にわくわくします。新発見があれば良いと思います。しかし、シーラカンスの泳いでいる姿を見ることが出来るか否かは神のみぞ知るでしょう。

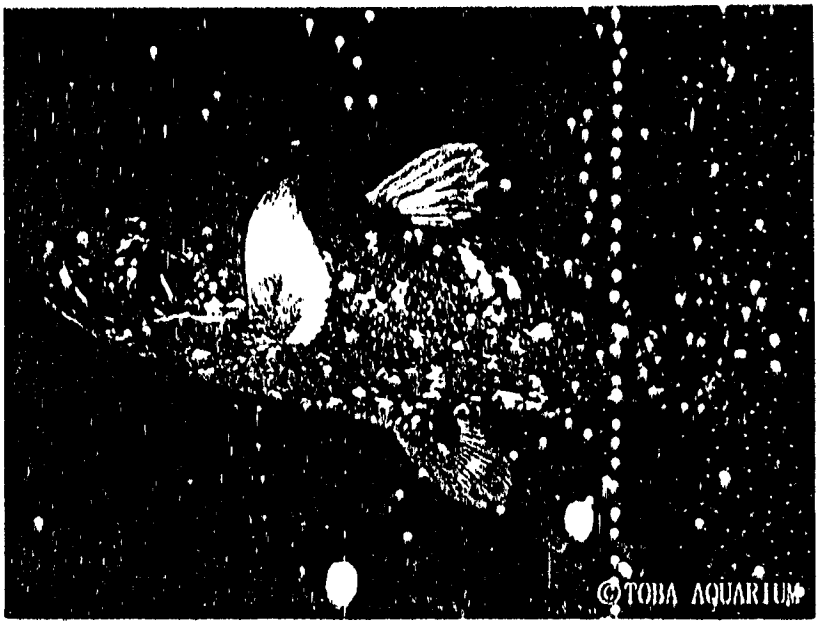
5月に入った今、私はまだ発見のニュースは聞いていません。

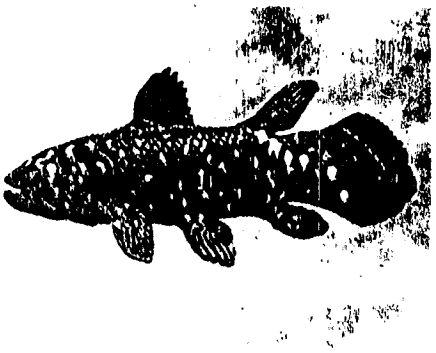
しかし、4億年の昔から、ひっそりとマナドの沖に歴史を刻んでいる魚がいることは、事実です。

温暖化による異常気象、人類活動に伴う大量で多種多様の廃棄物等々、我々は、大きな影響を環境に与えています。

しかし、我々によって、彼ら 4 億年の歴史が閉じられてしまう事になってはならないのです。

今、我々人類は、かけがえのない地球に様々な生き物と共存するため、色々なことを良く考えて慎重に行動しなければならない時代に差し掛かっているのだと思います。





シーラカンス［ラティメリア科］ *Latimeria chalumnae* Smith, 1939[Latimeriidae]のイメージです。

なお1998年7月30日に、スラウェシ島で撮影されたシーラカンスの写真が、インターネット上で公開されています。興味のある方は、神奈川県立生命の星・地球博物館「http://www.city.odawara.kanagawa.jp/museum/g.html」または、国立科学博物館「http://www.kahaku.go.jp/」研究の項目の「魚類写真データベース」で「シーラカンス」を検索してみて下さい。

ビトンから帰国、その後

川口　博康

皆さんお元気でご活躍の事とお察しいたします。お陰様で私も家内共々元気にやっております。　当時は皆様に本当にお世話になりました。　ビトン駐在から帰国し、早いもので５年半が経ってしまいました。

５５歳の役職定年となって、どうにも身の置き場所に困り、海外にでも、と思ううちに出てきたのがビトンということでした。
滞在中は色々なことが起こりました。個人的にはデング熱にかかり「鼻血」が出たことからヤバイことになったと地元の皆さんの判断から「家族」をすぐに呼びなさい」と、妻と子供たちが駆け付けてきた事もありました。
また、インドネシアがデフォルトするのではないかと真剣に肌で感じた経済危機の中で、個人的に預金していた外貨が引き出せなくなり、仕方なくルピアで受け取ったは良いものの、日本に持って帰っても使えない為、思い切って駐在記念と老後の楽しみにと３０００坪の土地に家を建ててしまいました。土地探しと家の設計は、楽しく充実したひとときでもありました。
このときの騒動がきっかけとなり、総領事館のご指導もあって「北スラウエシ州日本人会」を立上げました。当時は真剣に脱出方法や横の連絡方法を考え、日本の冷凍運搬船の船長さんにも「脱出のときはよろしく」と渡りをつけたりもしました。　またインターネットの「よろずインドネシア」は貴重な情報源でした。自衛隊の一隊員さんから「ＰＣ３輸送機が救助に行くので飛行場の情報を、＿」との書き込みもありました。（後で削除されましたが）

正式な駐在員事務所（ワンマンオフィス）を立上げ、４年半ばかりが経過し、いよいよ６０歳定年をビトンで迎えるなか、会社からは事務所をたたんで帰国せよとの指示がきました。　会社としては継続する価値なしとの判断で、この事務所は私だけのためにあったようなものでした。　このような経験をさせてくれた上司や会社に今でも感謝しています。　年に一度のＯＢ会に顔を出すのはこのときお世話になった方たちにお会いするためもあります。

２００１年２月に帰国、定年退職となったわけです。　日本の我が家に帰り、まず新聞、テレビで目についたのは「介護保険」のことでした。　好奇心と、退職後で暇をもてあましていたこともあり、「二級ヘルパー」の講習に片道１時間かけ御前崎から焼津まで通いました。地元の施設に実習でお世話になる中で、老後の現実を少しだけ覗かせてもらいました。そこは予想を超えた戦場でした。
老後について真剣に考えもしましたが、どんな老後か結論は出ていません。家内と一緒のときは何とかなるだろうが、一人になったとき、よぼよぼになったときは、等と想像してまましたが到底納得のいく回答なんて出てくるわけがありません。
これからの世の中では、自分で身の始末ができなくなれば、このような施設

に入らなければならないのか？　正直、施設で実習をうけながらショックを受けました。
インドネシアの社会をえらく懐かしく感じました。ちょうど冬の寒さもあり、あのけだるさが未だ体の皮膚に残っている未練もあり、早くビトンに戻りたいと思いました。

５５歳になったとき、退職後の生活に軟着陸させる配慮から会社は夫婦でセミナーを受けさせてくれました。　退職後の夢を思いきり書き込みました。
当時は、無事に定年退職すればサラリーマンの苦役から開放され、夢のパラダイスが待ち受けていることを信じていました。
夢はたくさんありましたが現実は厳しく、「夢」の実行は手の届かないところに行ってしまった感じがしています。　しかし先日、７０歳を超えた方がヨットで単独世界一周し無事入港、とのニュースには勇気付けられました。

幾つになっても、まず健康であることが第一だとおもいます。　帰国後の健康検査でひっかかり、成人病の手術をしました。　健康がいかに大切か病気になり入院しなければわからないところに人生の妙味があるのかとも思います。
帰国、退職の手続き、入院、家族全員でのはじめての海外旅行など、あっという間に半年が経ってしまいました。
こういう中で、何社かから再就職のお誘いを受けました。　結局、「ビトンの鰹節」に少しでも近いところにある今の仕事を選びました。

ビトン滞在中に立上げたかつお節工場は今でも健在で、兄弟会社まで増えています。　「日本人がいなくても、華僑でなくても、現地人だけで経営できる会社」を作ることが当時の私の夢でした。　今では私がお世話になった現地の皆さんだけで見事に運営しています。　これは私のささやかな誇りでもあります。

今年、ＷＴＯは日本人の平均寿命は８２歳（女性８５歳、男性７８歳）で世界一の長寿国と発表しています。　家内との会話も老後の生活の話題が多くなってきました。　年金だけでは生活できませんよ、との新聞雑誌の記事も目につきはじめたこの頃です。　さしあたりサラリーマンであれば退職してからあの世に行くまでの間が長くなっただけ。　単純に長寿を喜べないのではないか。
日本は資本主義の社会ゆえ、多くのことはお金で解決する社会となっています。　これを見越して老後、第二の人生のために充分なお金を準備した人は別です。実行できた方は素晴らしいと思います。私の周りにもこの凄いことをやった方があちこちに実在しています。この蓄えがない私は困りますね。

何はともあれ、現実の心配は、はたして年金だけで生活できるのか。　現状ではどんな計算をしてもとても無理との結論になってしまいます。周りを見回してみても同年輩では働いている方が圧倒的に多い。おそらくあの世に持って

に入らなければならないのか？　正直、施設で実習をうけながらショックを受けました。
インドネシアの社会をえらく懐かしく感じました。ちょうど冬の寒さもあり、あのけだるさが未だ体の皮膚に残っている未練もあり、早くビトンに戻りたいと思いました。

５５歳になったとき、退職後の生活に軟着陸させる配慮から会社は夫婦でセミナーを受けさせてくれました。　退職後の夢を思いきり書き込みました。
当時は、無事に定年退職すればサラリーマンの苦役から開放され、夢のパラダイスが待ち受けていることを信じていました。
夢はたくさんありましたが現実は厳しく、「夢」の実行は手の届かないところに行ってしまった感じがしています。　しかし先日、７０歳を超えた方がヨットで単独世界一周し無事入港、とのニュースには勇気付けられました。

幾つになっても、まず健康であることが第一だとおもいます。　帰国後の健康検査でひっかかり、成人病の手術をしました。　健康がいかに大切か病気になり入院しなければわからないところに人生の妙味があるのかとも思います。
帰国、退職の手続き、入院、家族全員でのはじめての海外旅行など、あっという間に半年が経ってしまいました。
こういう中で、何社かから再就職のお誘いを受けました。　結局、「ビトンの鰹節」に少しでも近いところにある今の仕事を選びました。

ビトン滞在中に立上げたかつお節工場は今でも健在で、兄弟会社まで増えています。　「日本人がいなくても、華僑でなくても、現地人だけで経営できる会社」を作ることが当時の私の夢でした。　今では私がお世話になった現地の皆さんだけで見事に運営しています。　これは私のささやかな誇りでもあります。

今年、ＷＴＯは日本人の平均寿命は８２歳（女性８５歳、男性７８歳）で世界一の長寿国と発表しています。　家内との会話も老後の生活の話題が多くなってきました。　年金だけでは生活できませんよ、との新聞雑誌の記事も目につきはじめたこの頃です。　さしあたりサラリーマンであれば退職してからあの世に行くまでの間が長くなっただけ。　単純に長寿を喜べないのではないか。
日本は資本主義の社会ゆえ、多くのことはお金で解決する社会となっています。　これを見越して老後、第二の人生のために充分なお金を準備した人は別です。実行できた方は素晴らしいと思います。私の周りにもこの凄いことをやった方があちこちに実在しています。この蓄えがない私は困りますね。

何はともあれ、現実の心配は、はたして年金だけで生活できるのか。　現状ではどんな計算をしてもとても無理との結論になってしまいます。周りを見回してみても同年輩では働いている方が圧倒的に多い。おそらくあの世に持って

行くお金を稼いでいるのではないと思います。　私と同じ方もいるらしいので、何か少しは安心しています。

これからの余生、「自分のくらし」を思い描くとき、たしかにお金だけでは幸せは買えないと思う。しかし、ささやかな夢でも実現させるためには、お金お金は絶対に必要ですね。
人生の後半を過ぎた今、お金のことであわてても仕方がない。足りない分は、健康で働けるうちに働くしかないとの結論になってしまいます。お金をいただく仕事というのはなかなかプレッシャーがかかるものです。働く喜びなどと言ってはいますが、人に使われることはなかなか大変、とため息が出るときも多々ありますよね。たぶんこれからは自分の気力との闘いでしょう。
若かりし船員時代に「お金は天下の回りもの」と、清水の夜の街を徘徊していた頃が懐かしいですね。　今の世の中でもこんな言葉が通用するでしょうか。

貯金ゼロの子供たちが「スキミングに会っている」と言ってとぼけていました。「高齢者の貯蓄動向」という統計は、４０００万円以上の貯蓄を保有する世帯は、高齢者全体の２割近く（１７．３％）を占めると発表しています。
高齢者の平均貯蓄は２４２４万円、若年．中年層の平均貯蓄は１２３９万円だそうです。
一方、今朝の新聞には、「高齢に不安」が８割、「長生きしたい」は５９％と載っていました。これからの高齢社会に多くの人はあまり良いイメージは持っていないようです。　何故こんなに多くの資産を持っていながら不安になるのか？　日本の社会は人間を幸せにしない社会になってしまったのでしょうか？
私も昨年からいよいよこの高齢者の仲間にはうりました。

駐在時のドサクサで造った家についてですが、現在年間維持費として３５～４５万円かかっています。当時は年金２０万円／月で少しは余裕をもって暮らすにはどうすればよいかとの発想のもとに得た結論が、年の半分をインドネシアで生活することでした。情けないのですが、まだ実行されていません。家の管理費だけが出て行きます。
処分しようか、慌てるな、もう少し辛抱して夢をつなごうか、迷っています。
すくなくとも当時の予定では、今頃は仕事を卒業し、年の半分はトモホンの家で馬か牛とたわむれていることになっていました。恥ずかしながらいまだに実行できずです。

昨年は選挙で任命されて町内会会長を務めました。どういうことで町内の皆さんが私を選んだのか？　今まで外にばかり出ていて町内会のことは何もやらなかったから、と云うこともあったろうと思います。　選挙の結果については断れない掟となっています。断れば「村八分」でしょう。私には町内会の行事・慣習のことなど何もわかっていません。　ここでも家内の助けが必要でした。
合併して市政初年度と云うこともあり、何かと忙しい一年でした。　長年住み慣れた文化のなかで、合併によって、違った文化を持っている隣町と日々の

生活を同じにすることの難しさを知りました。一国二制度は市民にとって戸惑うことが多すぎます。

在職中、市役所に対して４５項目の要望をだしました。蜂の巣の除去から区民館建設まで、バラエテイーに富んだ内容でした。　行政も大変と捉えるべきか、民間と比べて手ぬるいというべきか。確かに私が今まで経験した仕事のやり方とはちがったやり方でした。

台風２２・２３号の直撃を受け、御前崎はじまって以来の被害がでました。町内会長イコール自主防災会長であることから、たくさんの皆さんの協力を戴きました。お陰で私の担当する自主防災会では全世帯が何らかの被害を受けましたが、幸いに死者はでませんでした。　この災害は、すぐそこまで来ていると言われている東海地震の前哨戦であったかも知れません。

この台風で、いままで町内で守ってきた観音堂が被害をうけ、その修復費用の５００万円の捻出のために駆けずりまわりました。町の産業である漁業も衰退していくなか、信仰心すらどこかに行ってしまったような今日このごろです。昔のような手法ではお金は集まりません。市政第一号の文化財に指定してもらったりして宣伝もしました。　任期中に修復も無事完了し、この春、後任に引き継ぐことができました。

この一年、今まで出入りしたこともない市役所に入るようになり、市長はじめ市役所の皆さんとの接触は、私にとって新しい経験でした。

高齢者の仲間にはいったいま、特に学生時代から親しくしてもらってきた友達が欠けていくなかで、今回の仕事を通してたくさんの人達と出会うことができました。　何とか家内と一緒に無事に務めた町内会長の一年間の代償と思い有り難くいただきたいと思っています。

このような我が家にも、孫が二人にふえました。明日は孫を連れて夏服でも買ってやろうと楽しみにしています。孫を抱けたことは帰国後の最も大きな喜びです。

縁ありましたらいつの日かお会いできますことを楽しみにしながら
遙か遠い内地から皆様のご健勝を祈願しております。

２００５年　５月末
御前崎にて　川口　博康

２００５年７月吉日記

ビトン市再訪

元JPC　石野赫

北部スラウェシ日本人会の皆様、ご健勝の事と拝察致しております。小生のビトン駐在期間は２００１年８月から２年７ヶ月という、皆様の滞在期間からすればかなり短期なものでした。しかし、その間公私に亘りいろいろお世話になり深謝している次第です。

お蔭様で、この地に小生にとって忘れがたい「モニュメント」が二箇所できました。帰国してから既に１年と５ヶ月が経過致しましたが、気持ちとしては片時もビトンから離れたことがないと言っても過言ではありません。

一つは、コンサルタントの立場からでしたが、コンテナー埠頭並びに港湾関連設備建設に参画し、この港が国際標準を満たした施設へとレベルアップする事に寄与できたことです。この建設は、円借款（いわゆる日本政府によるＯＤＡ案件）によるもので、日本の建設会社「リンカイ」さんが工事を請負い、完成させたものです。出来映えも良く、仕事を指揮された青山秀夫所長には、足を向けて眠れないような気持ちでおります。（この施設の規模その他については「タルシウス」９号で発表させてもらいました。）

聞くところによりますと、青山所長は現在ヴィエトナムに駐在し、あの大河メコンに橋を掛ける仕事に従事されているとか。再度のご成功を祈る次第です。

次のモニュメントは、新しく整備成った「日本人墓地」です。大岩富氏、長崎節夫氏及び井上隆氏のお三方と力を合わせ、それに、当時の在マカッサル渡辺奉勝殿やビトン市役所担当者カロ氏の心温まるご支援、沖縄県からの援助、墓地建設を率先して引き受けて下さった「リンカイ」青山所長の援護、それに北スラウェシ日本人会会員皆様のご協力を得て新墓地を完成しえた事です。

ドロとゴミに埋もれた以前の墓群を思い出しますと、この新しい立派な墓地に心の安らぎを覚える次第です。

この計画をご支援下さった方々、ありがとうございました。心から感謝申し上げております。この紙面を借りて御礼申し上げる次第です。

＊　＊　＊

実は、去る6月、渡辺奉勝元総領事からのお話もありまして、戦争中北スラウェシへ進駐された元海軍軍人の慰霊団の方々に合流し、ビトンを再訪する機会に恵まれました。マナド到着早々、団員（奥様方も含めて一行１６名）のご意向でこの墓へ先ずお参り頂いた次第ですが、訪問して下さった方々と墓地に眠る人に「軍属」も多々おられたことから、その対照性に何か複雑なものを感じた次第です。

翌日は、慰霊団に同行しマネンボネンボでの元海軍慰霊祭に列席させて頂きました。式次第が進むにつれ、前日の思いもこみ上げて来て、「戦争」の虚しさをつくづく感じました。これは小生だけではなかったろうと思っております。

＊　＊　＊

先般、長崎節夫氏から「タルシウス」第十号の編集を担当されるとの連絡を受けた際、第九号の編集を担当した者として大変嬉しく感じました。ましてや、初刊から第八号まで編集を担当され、日本人会誌としてその内容の豊かさで評価を高められた川口博康氏や川井雄二氏にとって、この新編集者現るのニュースは更に感慨深いものがあったのではないかと思ったりしております。

＊　＊　＊

末筆ながら、皆様のご健勝の程を祈念しつつ、この拙文を閉じさせて頂きます。

以上

アジアの地図を開けば誰でも気がつくことですが、インドネシアの島々から日本列島、カムチャッカ半島まで、飛び石のように島が連なっています。特にインドネシアの島々からルソン島までは、大小の島が密集して飛び石の間隔も狭く気候も穏やかな熱帯性気候であるので、古代人でも丸木舟などで隣の島と容易に行き来したことでしょう。

さらにルソン島から日本列島までは、飛び石の間隔はやや開きますが、ここでは飛び石に沿って「黒潮」という名のベルトコンベアが設置されています。たとえばサマール島の浜辺の椰子の木から落ちた実が、波にゆれながらベルトコンベアーにのっかって、伊良湖岬の浜辺にたどり着くことがあるわけです。

ある民族学者がその椰子の実を見て、あとで東京に帰ってから島崎という名の友人にその浜辺の椰子の実の話をした。名作「椰子の実」誕生にまつわる裏話ですが、「流れ寄るのは椰子の実だけではない」とひらめいた民族学者も日本の民族学に新風を吹き込むことになりました。

民俗学とは縁のない日常を送っている私でも、時々インドネシアの風俗、習慣言語のなかに郷里（沖縄）のそれとの共通項を見いだして驚くことがあります。

インドネシアの諸々のことに人一倍興味を持って勉強されている川井さんが最近探り当てた貴重な資料のなかから、ミナハサ創世に係る民話を送ってきました。インドネシアの古事記の世界です。　次頁をどうぞ。

（編集子）

日本の神話が南洋の神話に影響を与えたというが、本末転倒であることは言うまでもない。
この「上代太平洋圏」の中には、ミクロネシア、ポリネシア、インドネシアなど各地の神話・民話が紹介されているが、他の地方はともかく、インドネシアの神話・民話に限っては、特に日本に都合のように捏造・変形されたふしもみえない。
ここに掲載したミナハサの「トアールとルミントットの話」や「ジャワ文字の起源の話」などオリジナルのものに近い。
著者が何を種本にしたかは判らないが、昭和17年当時にこのような多種のインドネシアの神話・民話が日本に知られていたとは驚きである。

ここでは、参考までにインドネシアで発行されている民話シリーズからこの「トアールとムミントット」の話を紹介する。

出典:　題名　:「Cerita Rakyat Dari Minahasa」
　　著者名: Aneke Sumarauw Pangkerego
　　出版社: PT. Gramedia Widiasarana Indonesia
　　発行年: 1993年

トアールとムミントット（要約）

上代太平洋圏
世界興廃大戦史(全二十七巻) 東洋戦史篇 (第二十四巻)
仲小路彰 著
戦争文化研究所 世界創造社 發行
昭和十七年五月三十日 發行

第一章 セレベス島

ミナハサの天地創造

太始には、何もなく、たゞ茫々たる海があるのみ。海洋の中に、一つの大なる岩があつて、不斷に波にあらはれてゐた。その岩から一羽の鶴が生まれた。

岩は鶴を生むときに汗を流した。その汗の中から、ルミム・ウツドといふ女神が生れた。

鶴は女神に対して——

「二握の砂を取つて撒きちらされよ」と云つた。

女神は砂を海岸に蒔きちらすと、忽ちそれは大きくなつて世界が發生した。

世界が創生されると、女神は高い山に登つて、その頂上に立つて、吹き來る西風に體をさらした。

その時、彼女は孕み、やがて一人の男の子を生んだ。

男の子が生長すると、ルミム・ウツドが妻を娶るやうに勸めた。男はそれに從つて、女を探したがいづこにも發見し得なかつた。

ルミム・ウツドは哀れに思つて、自分の背と同じ長さの杖を息子にあたへて、

「この杖より背の低い女を探すがよい。その女を見出したならば、それはお前の妻となる運命を有する女である」と。

二人は別れて、世界を一巡することとなつた。母は右に廻り、子は左に廻つた。

子は左に廻つて遠く歩いて行き、遂に世界を一周して、二人はまた逢つた。

二人はあまりに長く別れてゐた爲に、相互にその顔を忘れた。

男は杖と女との高を比べると、杖はのびて、女の身體よりも高かつた。かくて、男は彼女と結婚した。この二人の間に、多くの子供が生まれ、それはすべて神々となつた。

セレベス島のミナハサ半島へ、用石技術やその他の古代文化を傳へた他國人もまた太陽の子孫であると信じられた。彼等の祖先はルミムウウトといふ女性であり、彼女は彼女の子トアルと結婚した。

彼女は子であつて、同時に夫であつたトアルは、太陽であつた。

かくて彼等は「太陽の子等」であつた。

セレベス島のミナハサ地方のトンテンボアン族の神話に、この祖先はルミムウトといふ女性であつた。彼女は舟に乗つてこの地方に渡來した。他の傳説には――太陽の光が一つの岩石を照し、その岩の中から彼女が出現した。

そしてトアルを生んだ。トアルの父なる彼女の夫は太陽であり、トンテンボアン族の王者の祖先は、太陽であつた。

また、一傳説には、白い泡頭が、太陽の光を受け、こゝにトアルが生れたと云はれる。

セレベス島の火の起源

太古のこと……最初の人間が神から火を授けられた。しかし彼等はこの火を粗末に取扱つてゐたために、消してしまつた。彼等は火をおこす方法を知らなかつた。――どうすればよいであらう?――といくら嘆息しても、効はなかつた。

タムボエジヤといふ者を、天界に上らせて、火を頂かせることにした。――彼は、天上界に上り、そこに居る人々に――「どうか、火をわけて下さい」と頼むと、

天上界の神々は――「よろしい、火を分けて上げやう。火をつくる間、両手で眼をかくしてゐてくれ」と云つた。

彼等は火の造り方を人間どもに知られたくなかつた。しかしタムボエジヤは、顔に眼を持つてゐたばかりではなく、腋の下にも眼がついてゐた。――かくて顔の眼は手でかくし、腋の眼で、天上界の神々のする火つくりを凝視した。それを知らぬ彼等は、鐵の片と燧石とを取出し、それを打ち合せて火をつくつた。その火をタムボエジヤに渡した。タムボエジヤはそれを持つて下界に下り、その火を作る方法を人々に教へたのであつた。

セレベスの人類の起源　【省略】

セレベス島の猿龜合戰　【省略】

セレベス島の續猿龜合戰　【省略】

《備考》①なるべく原文に合わせ、旧式漢字を使用いたしましたが、『祖』や『廻』などは旧式漢字に変換できなかったので新式漢字としました。

②本文中、文法的におかしい文章がいくつかありますが、そのままにしてあります。

墓地建設ご協力に対する御礼

長崎節夫

会報「タルシウス」第９号の発刊から今号の発刊までの間に当日本人会が関わった大きな取り組みは、北スラウエシ日本人墓地の建設でした。事業の経緯を要約すれば大略次のようになります。

平成１４年（2003）９月１９日、翌日に控えた海上自衛隊練習艦隊のビトン寄港にそなえて、マカッサルから渡邊総領事、竹山領事がビトンに入られました。この機会にビトン在住の大岩さん、石野さん、青山さん、井上、長崎を交えて総領事投宿のNARENDRAホテルにて、ビトン及びメナード周辺の日本人墓についての情報・意見の交換がおこなわれました。　北スラウエシ日本人墓地の建設事業は事実上この時点でスタートしたといえます。

墓地建設に当たって最初の問題は用地の選定・取得ですが、これには大岩さんがおもてに立って郊外の閑静な土地を確保できました。

そして最大の難問は資金調達となりますが、これには現地死没者の多い沖縄県側にご協力をお願いすることにして新聞報道などでよびかけ、それを受けて沖縄側の「北スラウエシ日本人墓地整備会」が設立され、沖縄での募金活動がはじまりました。

建設計画策定の段階では、港湾工事のためにビトン駐在中の石野さんが中心になって動いていただき、また施行段階では「りんかい建設」の青山さんはじめ、崎原さん、飯島さんに取り仕切っていただきました。特に石野さん、青山さんには建設資金の不足分まで補充していただきました。重ねて御礼を申し上げます。

北スラウエシ日本人会は、会発足以来たくわえてきた資金をこの事業のために提供しました。これは現在の会員のみならず、すでに転出された元会員の皆様すべてがこの事業に参加されたことを意味するものです。

このように多くの方々のご支援ご尽力の下に、平成１６年４月１日をもって建設工事がはじまり、６月１９日には渡邊総領事はじめ地元代表の方々、水産学校校長（教頭代理出席）、ビトン市役所を代表してファビアン・カロー氏等ご臨席のもとに落成式が催されました。

これをもってビトン・メナード方面に放置されていた日本人墓の問題が一応解決されたと思いますが、すべての墓が新墓地に収容されたわけではないと思うので、引き続き情報の収集にあたるつもりです。

また、墓地建設のあとは管理の問題が続きます。これについては、墓地整備会をそのまま「墓地管理会」に名称変更して、今後の墓地管理に当たっていきたいと思います。

なおこの墓地建設を受けて、平成１７年４月１日から北スラウエシ日本人会あて、日本人墓地およびマネンボネンボの海軍慰霊碑の管理費用として年額２００ US$ が支給されることになりました。微々たる金額ですが、もとをただせば日本国民の血税ですから、ありがたくいただいて墓地・慰霊碑の管理に役立てたいと思います。

日本人墓地建設の意義はあらためて申すまでもなく、心ならずも当地で死没された方々の墓を一カ所にまとめて祀り、御霊を安んじることにありますが、それに加えて「歴史の保存」という重要な意味があります。それほど遠くない昔に、故郷をはなれて南海に雄飛し、現地のひとびとと見事に融和してその足跡をのこされた。現在ビトンの主産業となっているかつお釣り漁業は彼等がのこした技術が受け継がれたものです。墓地の慰霊碑は単なる慰霊碑ではなく、彼等の功績をたたえる顕彰碑でもあるのです。慰霊碑に「鵬程万里」と刻んだゆえんであります。

歴史の保存は、その歴史が受け継がれ発展することによってその輝きを増すことになります。落成式からおよそ３カ月後の９月２３日、沖縄の墓地整備会メンバーを主体に遺族代表をふくめて１０名の墓参団がこられ、慰霊祭が催されました。　この日はビトン在住会員のほか墓地周辺の住民多数が慰霊祭に参加しました。自然の成りゆきとして慰霊祭は交流祭りとなり、遺族代表の城間安子さんの指導で参加者全員が沖縄の踊りを踊って実に感動的な盛り上がりを見ました。　日本人墓地を媒体としてインドネシアと日本の市民階層で友好と理解の輪がひろがってゆく。泉下の先人たちもきっと、我が意を得たり、と喜ばれたことでしょう。

以上、北スラウエシ日本人墓地の建設の経過と墓地建設の意義について、墓地整備会を代表して申し上げました。　今後ともなお一層のご協力をお願い致します。

泡盛の話

長崎節夫

今からおよそ４８０年前の西暦１５２１年６月、現地住民との戦闘で総司令官のマゼランをはじめ多数の同僚を失ったスペイン船隊は、危うくセブ島を脱してミンダナオ海を西へ向かった。　西航の途中、ミンダナオ島北東部にある集落に立ち寄る。　集落に立ち寄ったのは、情報収集のためであった。たぶん、村の前浜で、地球の裏側からやってきた紅毛の船乗り達と村の色黒男衆のあいだで次のようなやりとりがなされた。

「オラタチハ、エスパニョーラカラハルバルヤッテキタケンド、ジツハマルコノシマニユキタインジャ。ドノホウガクニユケバヨイノカ、シッテイルナラオシエテクレ」
「サア、マルコノコトハヨウシランケンド、ココカラタイヨウガシズムホウガクニユケバエライニギヤカナミナトマチガアルソウジャケン、ソコデキケバワカルカモ」
「サヨカ、トコロデソノミナトハナントイウミナトジャ」
「サア、ヨウシランケンド、ブルナイトカブルネイトカイウトッタノ」
「サヨカ、テリマカシバニャ」
というようなやりとりがあって、更に次のような話もでた。
「ここから北の方向にルソンとよばれる大きな島があって、そこには毎年７，８隻ほどのレキオの船がやってくるそうじゃ」

上の会話のカタカナ部分は私の勝手な想像であるが、ひらがな部分は船隊の隊員のひとり、ロドス島出身のアントニオ・ビガフェッタという男が航海の記録に残してくれた。それを日本では岩波書店が「大航海時代叢書」として出版して、私がそれを読んで、見てきたようなことを書いているわけです。

スペイン船隊（この時点で２隻）はミンダナオ海を太陽の沈む方向に向かいスルー海に入った。さらに右に寄り左に寄りしながら航行して、とうとうブルネイに到着した。ブルネイは当時、環南シナ海随一の国際貿易港である。ここでまたカタカナ会話になる。会話の相手はたまたまブルネイに入港していたジャンクの親分ということにしよう。

「ソコノオヤブンサーン、アナタハドコカラキナスッタカノー」
「ワシカ？　ワシハマラッカカラキタバカリジャ。ココデスコシバカリショウバイシテ、ソレカラシュウサングントウニムカウンジャ」
「オヤブンサンハ、マルコノシマ、シッテイナハルカノー」
「マルコ？チンケノアルシマノコトカ？」
「イエス、イエス、ソノチンケノシマハ、ドコニアルカシッテナハリマスカ」

ジャンクの親分は、「マルコのことを知らずして船乗りと言えるか」と大見栄を切ったかも知れない。　マルコ（マルク）諸島のチンケ（クローブ、丁子）

は、バンダ諸島のナツメッグと並んで、東洋と西洋を結ぶ香料貿易の最重要商品であった。そしてこの商品が東洋の産地から西洋のマーケットに流れる際の通過ポイントがマラッカ海峡のほぼ中央部にある港市「マラッカ」であった。香料貿易の要衝マラッカは１０年前の1511年にポルトガルの手に陥ちていた。

マラッカと、香料の産地であるバンダ・マルク諸島を結ぶルートは２本あった。ひとつはマラッカ海峡の東口から南下して、ジャワ海をジャワ島北岸ぞいに東航してバンダ諸島・マルク諸島に至る航路、他のひとつは、マラッカ海峡を抜けた後南シナ海を北東に進んでブルネイに立ち寄り、さらに北上してボルネオ島の北端からスルー海に入り、セレベス海を南東に進んでミナハサ半島の北方海域に達し、そこからマルク．バンダに向かう航路である。

大まかに言えば、マラッカ海峡とマルク・バンダ諸島の間にはボルネオ島、スラウエシ島の二つの大島が横たわっており、それの北側または南側を迂回する二つの航路があったわけである。

スペイン船隊が飛び込んだブルネイは、北回り香料ルートの重要拠点であったのだ。ジャンクの親分は遠来の船乗り達に、「皆様ハ、ココカラ岸ツタイニ北上シテ、コノシマノ北端ヲ右ニ回リ、太陽ノ出ルホウコウニススマレヨ」とのたまわった。　船隊はこのあと３カ月がかりで曲がりなりにもテルナテの南隣りのチドレ島にたどり着いた。テルナテ島には、ポルトガル勢がすでに入り込んでいたのである。　このあと、２隻のうち１隻はさらにインド洋を横断、無事スペインにたどり着いて地球一周の壮挙をなしとげることになる。

そのことはさておき、問題は「泡盛」であった。

国際港市ブルネイの王様はスペイン船隊の来着を歓迎した。客が多いほど港は賑わい国は富む。熱烈歓迎、スラマットダタンというわけで、王様は遠来の客に土産の品々を進呈した。　山羊や鶏にまじって壺に入った「アラック」と呼ばれる「酒」があった。原料は米。　強烈だが旨い。「乗組員の殆どが酔っ払った」とピガフェッタは記している。

泡盛のルーツがアラック酒にあることは、ほぼまちがいない。　１５，６世紀の琉球王国は支那との朝貢貿易のみならず、ルソン、ブルネイ、バタニ、マラッカ、バンテンまで船脚を伸し、交易で国を支えていた。　アラック酒がその醸造技術とともに琉球に伝わってくるのは自然な流れであった。。

泡盛が南方からやってきたことを示す証拠の一つは、現在でも原料としてタイ米が使われていることである。　大ざっぱに見て約６００年前に伝わった醸造技術は、琉球の気候風土の中で磨きあげられ、今や、「西のコニャック、東の泡盛」と世界を代表する酒として認定されるに至った。（私が認定した。）

ひとくちに「泡盛」と言ってもその品質はいろいろで、特に最近は多様な客層に対応しようとして水で薄めたようなものや、香料を混ぜたものまである。正統派の酒飲みならば泡盛も正統派のそれを味わうのが正しい飲み方だとおもう。　人それぞれの好みもあろうが私の好みでえらべば、菊の露酒造、石川酒造、久米仙酒造、瑞泉酒造、瑞穂酒造等の８年貯蔵以上の酒がお薦めである。

この天下第一の酒琉球泡盛をどのようにたしなむか。　これまた人によりけり、自分の好みの方法で味わえば良いのであるが、６０年の経歴から到達した私の秘伝を公表しよう。私はは泡盛のグラスに「氷」を入れないようにしている。オンザロックはダメ。お湯とミネラルウオーターで酒の濃度と温度の調整をおこなう。温度は大体「ひとはだ」くらいか。その時の自分の体調によっても微妙に変わるような気がするが、ちょうど体に合う濃度と温度がある。このときの泡盛の風味をゆっくりたのしむ。西部劇のジョン・ウエインのようにグラス一杯一気にやるのはよろしくない。　泡盛の肴は白身の刺身が最高。シロクラベラ、タマメイチ、ブダイの刺身がお勧めです。白身のさかながなければ鰹でも鮪でも結構、豚の足、ゴーヤーチャンプルー、カツオの生節でもＯＫ。生かき、エスカルゴ、スモークサーモン、何でもよろしい。

（泡盛も肴もないビトンでこんなこと書いている自分が情けなくなってきた）

南方渡来の泡盛は、以前は沖縄以外の日本内地でほとんど見ることはなかったが、いまでは日本全国どこでも目につくようになってきた。泡盛産業は今や沖縄の基幹産業にのしあがった感がある。

反面、本家東南アジアのアラック酒といえば、現地の人々もバカにしてまともな店では扱っていない。この差はどこからきたのであろうか。この一点を追求するだけで学位論文が書けます。若い諸君、挑戦してみませんか。

琉球列島の南西がわの突き当たりは台湾である。その台湾には「米酒（べいちゅう）」という酒がある。これが泡盛の兄弟分であるが、味はいまひとつ洗練されていない感じである。おそらく熟成の問題であろうが、台湾はいますぐにでも高級な泡盛酒を造り出せる状態にあると思う。

日本の政界では台湾の立場をめぐっていろいろ議論があるようだが、私個人の立場でいえば、隣組のよしみもあるし、ときどきビトンに入港する台湾漁船の船頭達から自家製のカラスミと一緒に米酒をいただいて幸せをかみしめたりしている関係上、これからも琉球弧自由主義陣営のメンバーとして台湾が発展していくことを願っている。

つづく

ひとくちメモ

穴の法則・・・地面に、容積Ａの穴を掘ったとする。このとき掘り出された土（砂）の体積Ｂは掘られた穴の容積Ａより大きくなる。　しかしこの土で穴Ａを埋めようとすると土がたりなくなる。

Ａ＜Ｂ，　Ａ＞Ｂ　　？？！！！＋－？

こんなことってあり？

平野　健

小生もこの地に足を下ろしてはや十年が過ぎ、古参の部類になりつつあり、根っこが生えかかっています。
最近、次のような災難に見舞われています。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、七月に行われたビトン市長選挙で、投票資格のない外国人に対し、投票資格証明を発行した問題で、未だに（八月末時点）正式な市長が決まらない異常事態が続いています。
小生にも選挙管理委員会より、投票資格証明が発行されているとして、八月初めより幾度となく、市警察の担当が、自宅、若しくは会社に来て、投票の有無についてあれこれ尋ねるのですが、私自身、投票資格証明なるものを見たこともなく、さらに投票当日は、商用でバリ支店に居ましたので、旅客機のボーディングパスとチケットの控えを市警察の捜査係に手渡し、「選挙投票に関して、何の事情があるのかは知らないが、私には全く関係がない！」と強く突っぱねました。
事態はてっきり収束に向かうものと思っていました。ところがある日、市警察の法律専門の捜査官が会社に来て、「現在、あなたの居住地区のクルラハン長(村長)の取調べを進めている。証人証明書を作成しなければならないので、市警察のほうへ出向いてくれないか、もし、作成に同意してもらえなければ、裁判のときに証人として出廷してもらわなければならなくなるかも知れない。」「えっ!裁判の証人？なにそれ・・・」そんなところに呼び出されたらたまったもんじゃない。後ほど出向き、質問に答えながら作成が始まりました。
質問内容は、いつからインドネシアに来て何をしているのか？家族構成は？妻の名前はフルネームで言えるか？会社の現住所は？登記上の住所は？投票資格証明の番号を知っているか？本当は投票資格証明を受け取っているんじゃないか？本当に投票してないか？？？まるで容疑者扱い。だんだん腹が立ってきましたが、我慢をして答えていました。夕方六時から二時間の後、やっと終わり、プリントアウトの段になったら、「あれ？コンピューターが動かない!!」10分ほどあちらこちらをいじっていましたが、結局ダメ!! 保存する前に動かなくなったので、「再度作り直すから日を改めて来てくれ・・・」ここの警察というのはいったいどうなっているの？？？

全くいわれのない問題によって、突然降りかかってくる災難！
皆様もくれぐれもご用心ご用心・・・

編集後記

今年４月のある日、前号の編集担当者石野さんと新宿の居酒屋で会いました。石野さんにうまく乗せられたか、薩摩のいも焼酎の甘いで気分が桜島くらいになっていたのか、あるいはその両方の複合作用か。　気がついてみたら会報次号の編集を引き受けていました。　「身のほど知らず」とはこのことで、以後、後悔と義務感のチャンプルーでフラフラしながらようやく第１０号発刊の見通しが立ってきました。

今号は日本人墓地建設のからみもあって、沖縄から糸満盛健氏（元・沖縄県漁政課長）、上田不二夫沖縄大学教授の寄稿がありました。ご両名とも日本・インドネシアの交流促進に視点をおいて、現地日本人会の意義役割まで言及しています。これに対応するかのような寄稿がトモホンに新設の日本語学校の玉井さん、上杉さんからありました。異なる民族どうしが理解し合う第一歩は、まず意志の疎通です。喧嘩するにも恋を語るにもはじめに言葉ありき。　私の実感としては、他所は知らず、北スラウエシに限ってみても日本語教育の普及度は不十分であるとおもいます。　本会には政府派遣の日本語の先生方もいます。厳しい環境のなかで大変なお仕事だとおもいますが、インドネシア・日本の未来を造る仕事ですから、日本語指導の皆さんには、がんばっていただきたいと思います。

川口さん、川井さん、石野さん、羽根井さんには、すでに転出されているにかかわらずご協力を戴いています。「くされ縁」ではなく「切っても切れない仲」だとあきらめて、すえながく付き合っていただくようお願い致します。

気の早い話ですが、次号は来年２月発刊を予定しています。　２月末締め切りです。今回忙しくて原稿に手をつけられなかった方も、次回はよろしくお願いします。　今回寄稿された方はまた新しい話題を提供してください。
青木さんからトモホン日本語学校の写真が届きましたが、ファックスの感度が悪かったので次号にまわします。どうぞ悪しからず。

今号掲載の会員名簿は、会員各位の住所、電話番号、メールアドレスなど、あえて省きました。当会および会報についての問い合わせは下記あてお願いします

平野　　健　　H/P 0812-430-0620　Fax 0438 34363
長崎　節夫　　H/P 0812-430-6782　Fax 0438 36022

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。